

【 成り立ち 】

- ・臨済宗の龍徳寺を4代目生駒家長が織田信長の命で久昌寺として再建。
- ・生駒家宗の長女で織田信長の妻になり、信忠・信雄・徳姫(五徳)を生んだ妻の死に際し、彼女を弔うために改修し再建したお寺であった。
- ・戒名：久菴桂昌大禪定尼
- ・曹洞宗では総本山の次に格が高く、**総持寺の直末のお寺**である。現在も8つの末寺が現存している。
- ・直末という寺格であるため**全ての僧侶が住職になれない**お寺である。
- ・織田信長が父の位牌に灰を投げつけたエピソードで有名な**万松寺と兄弟寺**の様な形式になり僧侶の行き来の記録が残る。

【織田信長と妻、「久菴桂昌尼」について】

久昌寺には「**久昌寺縁起**」という成り立ち及びその周辺の時代の事が書かれた巻物がある。

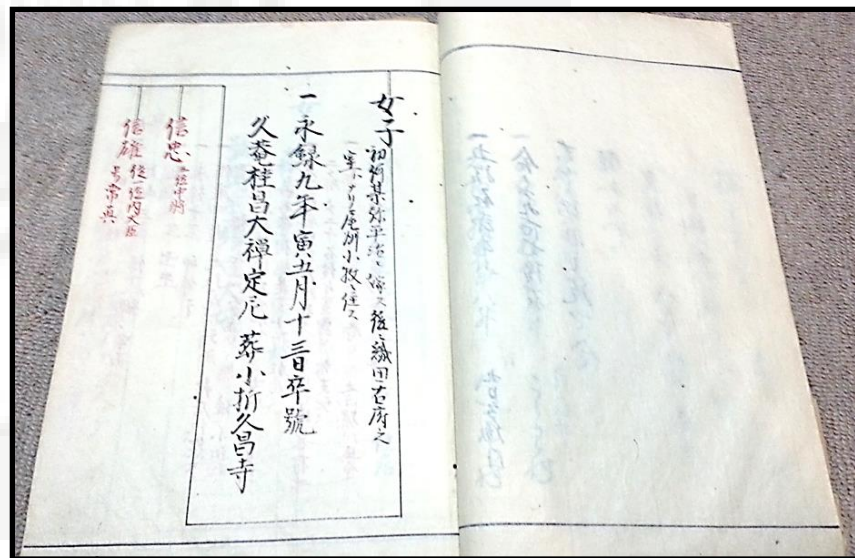
「妻の死に際し嘆き悲しんだ」「涙を流した」と当時のものでは唯一、信長の女性に対する感情が記されたものである。

《久菴桂昌尼について》

信長と出会ったのは14歳～19歳頃、亡くなったのは25歳～28歳頃と推測。

《婚姻について》

記載があるのは生駒家の家譜にある
「初何某弥平次に嫁ス」
信長と結婚後「小牧に住ス」とある。



【織田信長と妻、「久菴桂昌尼」について】

《出会ったきっかけについて》

政略結婚と思われる。

生駒家は信長と桂昌尼が結婚した頃(1554～1556年頃と推測)、犬山城の織田信清の家臣であり小折の地を開拓した領主であった。

桶狭間の戦い(1560年)で生駒家長が織田信長を支援する。
この際に褒美として織田信長からもらったものが

「諸国往来許可状」である。

後に織田信長の犬山攻略に尽力し、織田信長の家臣となった。同時に黒地に白色の角を備えた兜と黒い冑をもらい**黒冑の十人の一人として迎え入れられた。**

尾張統一を狙う信長にとって岩倉や犬山の織田家と対立している時期に中間の小折の地に自由に出入りする事は困難であったと推測する。

《参考年表》

1556年...岩倉城(信長親戚)と対立(1558年～1559年陥落)

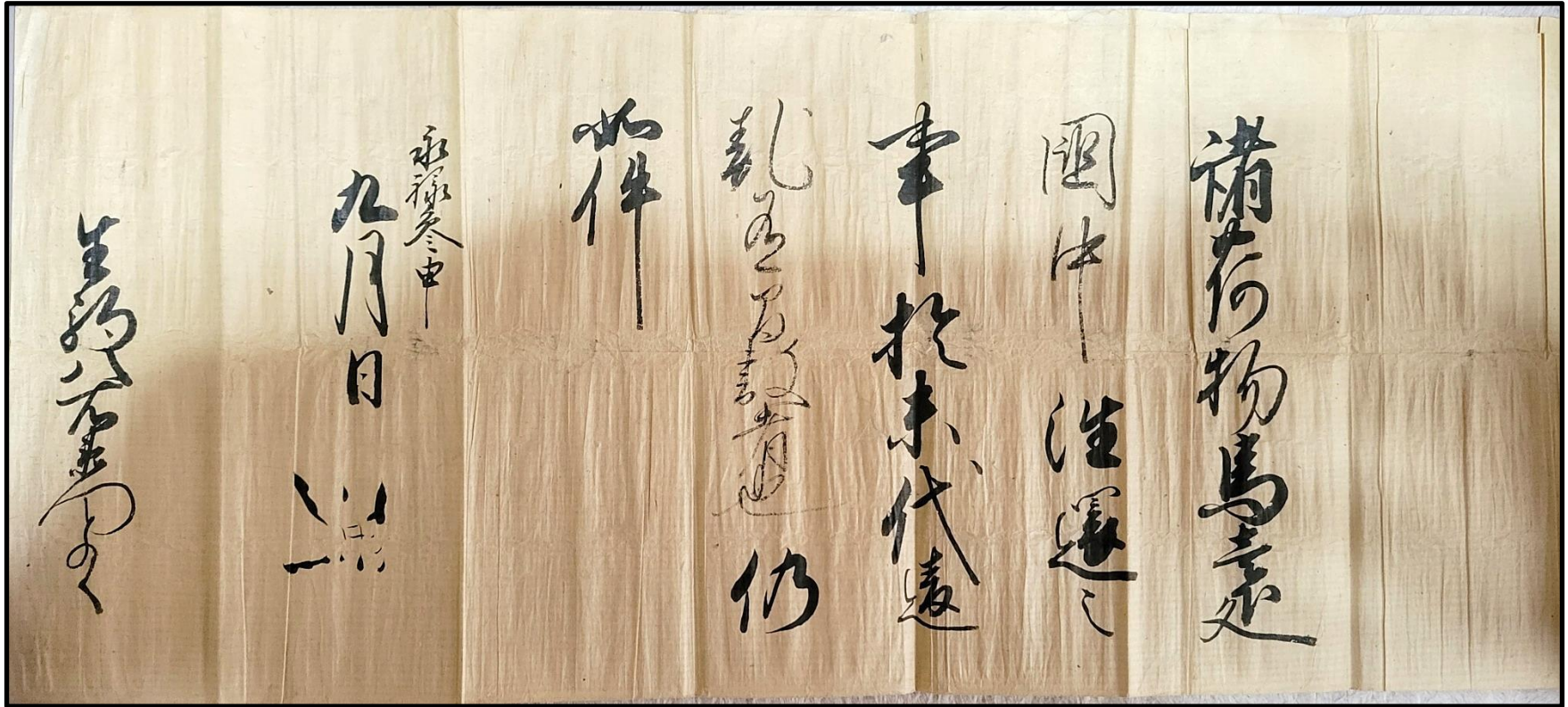
1560年...桶狭間の戦い

1564～1565年...犬山城(信長親戚)陥落———→これにより尾張統一を果たす。

1567年頃...稲葉山城(後の岐阜城)攻略

諸国往来許可状

生駒家長が永禄3年、桶狭間の戦いの際に織田信長を支援をしたため、褒美の意味合いで頂戴する。



「尾張の国中、自由に(関銭を取らず)通行してよい。

この事は、末代まで間違いないことである。」

【織田信長と妻、「久菴桂昌尼」について】

《久菴桂昌尼が眠る場所》

現在の田代「墓地」。八本の筒に入れたお経とともに埋葬された。

そのため、「**経塚**」と呼ばれる。

観音像について、織田信長が涙した小牧山に向いて建てられたとあるが

実際は**1600年代半ばに6代目生駒利勝が建てたもの。**

建てた理由は境界地を明確にするためと記録されており、その痕跡も現地で確認できる。

- ① 生駒平三郎
- ② 遊佐河内守(現在は道音寺に移設)
- ③ 経塚：観音像

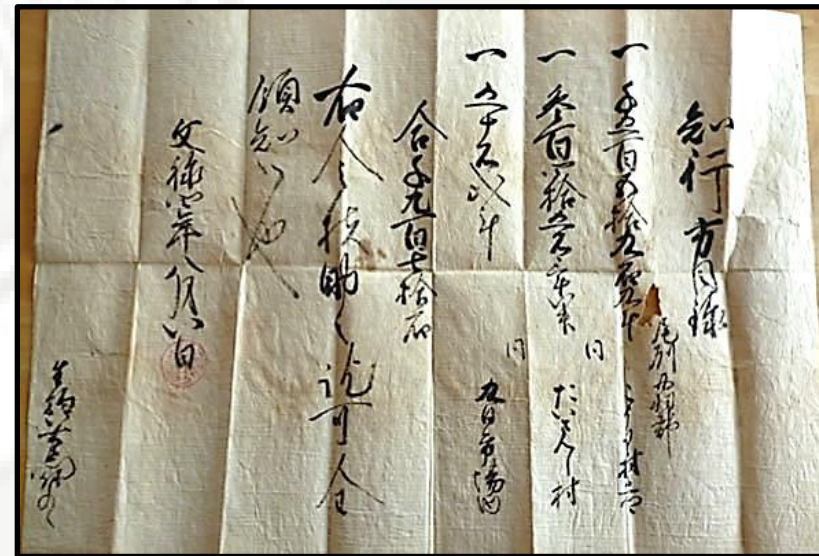


【久菴桂昌尼の兄 4代目生駒 家長について】

- ・信長の家臣の中で黒冑の十人と呼ばれる一人であった。
- ・信長の長女 徳姫(五徳)が松平信康(徳川家康の長男)に輿入れする際に信長に「ついて行ってあげてくれ」と命じられ、岡崎まで同行した。
- ・その際、徳川家康から「よくぞおいでいただいた」と一休禅師の掛け軸と上等品の刀をもらい帰った。

※信康死後、小折に移住する事になるが、信長は埴原という家臣を道中の護衛につけた。小折に住んだ後も護衛に付くよう命じられたため小折で天寿を全うした。

- ・徳川家康が信長の命で安土城に呼ばれた時に、家長が家康の手を引いて天守まで案内したと記録がある。
- ・豊臣秀吉と加納馬場の年貢の事で手紙を交わす。(2番目に古い)



秀吉 → 家長へ 知行目録

【 5代目生駒利豊と豊臣秀吉の関係】

- ・豊臣秀次(関白)の側近。秀次事件後、唯一生きる事を許され、小折に返るよう言われた。生きていて良いのか苦悩した。

《豊臣秀吉が久昌寺に香華料660石を与えた意味は》

朱印状にて久昌寺に660石を与えるとの施しを受けた。
秀吉の意思で660石を与えた事を後世に伝えるようにと
記載。

《参考年表》

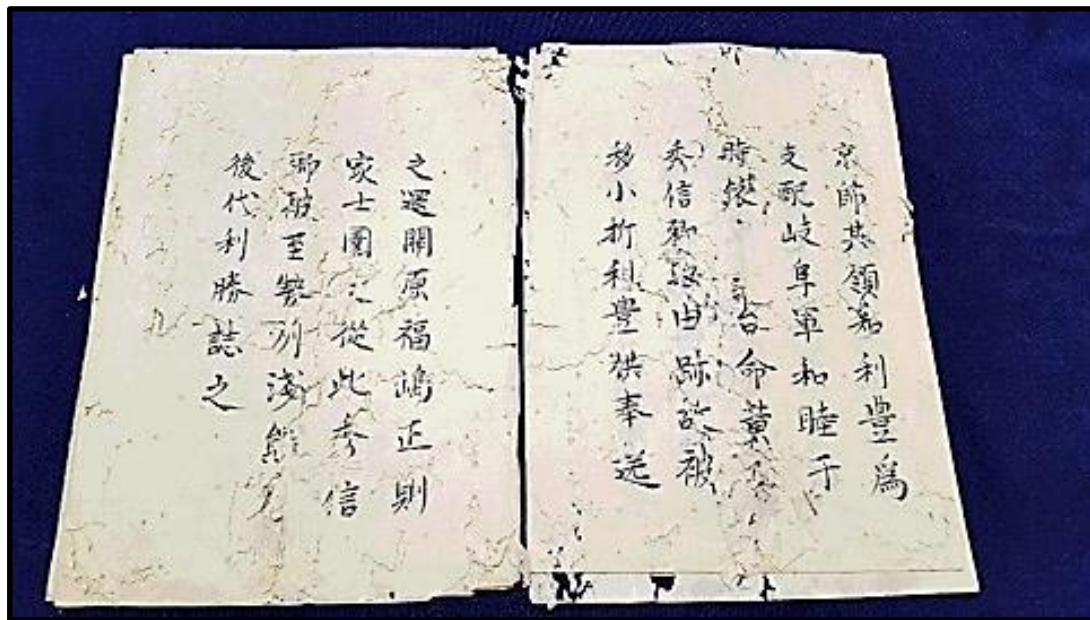
- 1591年・・・千 利久切腹・豊臣秀次が関白になる。
- 1593年・・・豊臣秀頼 誕生
- 1595年・・・秀次 事件・豊臣秀次切腹。生駒 利豊が小折に帰る。
- 1596年・・・久昌寺に660石が施される。
- 1598年・・・豊臣秀吉 死去。

【 5代目生駒利豊のエピソード】

- ・5代目：生駒利豊は福島正則の陣を借り「尾張衆」の一員として参戦。
- ・岐阜攻めの後、信長の孫、信忠の息子：秀信が生駒家を頼り小折に来た。「我ら縁者・・・」。
- ・その際、利豊は福島正則から、秀信が京都に向かう際に同行してあげて欲しいと言われたが断った。
- ・利豊は宇喜多秀家の重臣「足達勘十郎」を討ち取るなどの武功をあげた。（関ヶ原合戦の論争の一つ）
【参考】「生駒宗直物語」 河村氏 著 鶴舞図書館 所蔵（江戸初期）
「関ヶ原合戦の真実」 白峰旬 著 帯出版社 （2014年）
- ・70歳になり隠居後に、後の奥の細道と同様の行程を歩き、和歌を遺した。歌人としては「露月」と名乗る。（利豊和歌集現存）



宝頂山墓地



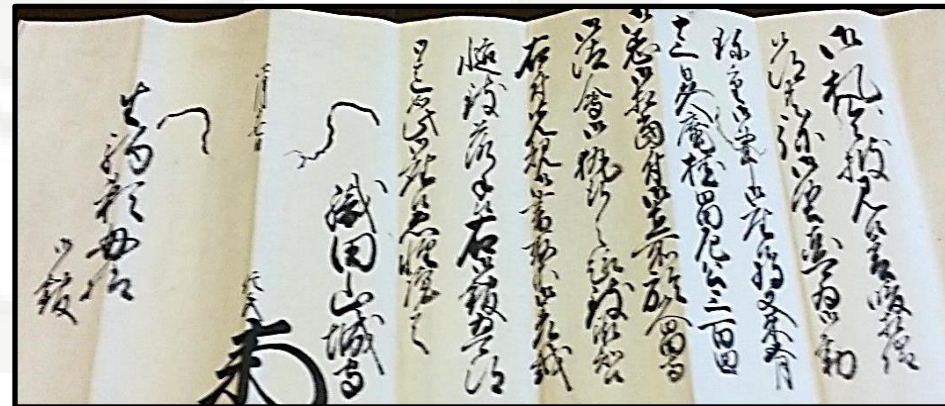
家形廟 碑文



利豐 家型廟 側面

【江戸時代・明治時代以降の久昌寺】

- ・寺社は寺社奉行管轄で戸籍管理を任されていた。そのため過去帳なる物が残る。
- ・藩主徳川の建中寺と生駒家の久昌寺だけ寺社奉行を通さない管理が許された。
- ・そのため宗教法人法施工後の昭和28年まで檀家は生駒家のみ。また地域の戸籍管理をしていないため久昌寺には過去帳が存在しない。
- ・久昌寺では桂昌尼の遠忌法要を50年毎に柏原藩の織田家に声をかけ300回忌まで行った。



【久菴桂昌尼が与えた影響】

- ・豊臣秀吉による厚遇。(小牧・長久手の戦い・利豊・香華料)
- ・前田利家の嫡男、2代加賀藩主：前田利長の菩提寺、その妻、永姫の菩提寺に影響を与える。

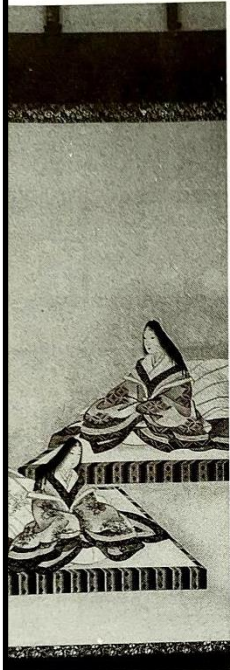
前田利長：瑞龍寺(富山県高岡市)
久菴桂昌尼の墓碑がある。

永姫：久昌寺(石川県金沢市)を建立。
位牌、肖像画を遺す。(次ページ)

- ・崇福寺(岐阜県岐阜市)
織田信長・織田信忠の墓碑がある。
「久菴桂○○○…」なる位牌を遺す。



金沢市 久昌寺 リーフレット



玉泉院と明庵和尚

玉泉院は信長の四女であり、側室の春鶯妙澄大姉が実母で、久庵桂昌大禅定尼の実子ではありませんが、大変母想いの慈悲深い人でありました。また、明庵誓傳和尚も尾張の国の生まれで、信長の子孫にあたり、縁あり久庵桂昌大禅定尼の菩提寺で出家し、加賀の宝円寺（前田利家公菩提寺）に随身している時に、玉泉院から御加護を受け当山の建立にあいりました。このように「信長―前田利長―玉泉院―明庵和尚―久昌寺」と結ばれ、結緒・由来の深い因縁があります。

当寺は、曹洞宗の禅寺で「奕葉山（えきようざん）久昌寺」といいます。

その歴史は慶長十五年（一六一〇）金沢東末寺の辰巳の方角、今の横安江町あたりに建立されましたが、天明六年（一七八六）当山三代の時に現在の堀川町に移転し、今日に至っております。

この寺は、加賀藩主 二代目、前田利長公の夫人、玉泉院（本名、永）が自分の義母、織田信長公夫人、久庵桂昌大禅定尼の菩提をこの加賀の国で弔う為にと願って、信長の子孫である僧明庵誓傳和尚にたのみ、夫人自ら建設資金を出し建立にいたしました。

そこで、久庵桂昌大禅定尼の戒名の「久」と「昌」を頂き、「久昌寺」の寺号とされました。

奕葉山久昌寺の沿革



久昌
禪
寺

中川一政画伯・筆

えきようざん
曹洞宗 奕葉山 久昌寺
金沢市堀川町29-2 ☎ (076) 231-5634
(JR金沢駅より徒歩5分)

▶明庵和尚木像



▲久庵桂昌大禅定尼と玉泉院の図

【久昌寺に出入りした意外な人】

- ・東皐心越(とうこうしんえつ)
江戸初期に中国から渡来した禅宗の僧侶・文化人。
水戸光圀(水戸黄門)に保護され、僧侶としての活動の他、篆刻(印の作成)や古琴の普及に務める。
- ・久昌寺に扁額と簾を遺す。



【龍神社との関係】

- ・久昌寺の西側にある神社。
 - ・織田信雄の祭神の神社である。(織田信雄を護る神)
 - ・徳姫(五徳)や利豊の棟札が残る。
-
- ・龍神社で雨乞いをしてても雨が降らなかった時、久昌寺にて「龍の鱗」を使い、久昌寺住職が雨乞いを行った。(大正時代まで)
「龍の鱗」は現存。

【久昌寺を廃寺にする理由】

- 宗教法人法施工後、曾祖父、祖父が近隣に末寺が多い
ため、積極的に檀家を集める事はしないとした。
末寺(子)の食い扶ちを親が取る事をしない。
- 結果、檀家からの収入を基本とする現行制度での寺院経営は宗教法人法施行時以降からできていなかった。
- 19代目となり、試行錯誤をし廃寺にする結論に至った。
- 少子高齢化や人口減、仏教離れによるものではない。
時代の身の丈に合った選択が必要と判断した。
- 先祖も19代目の判断を尊重してくれている。

【歴史を繋ぐ事、由緒を繋ぐ事】

- ・想いを伝える事、想いを受け取る事ができる関係が必要。
- ・誠実で謙虚で純粋な想いが必要。親子関係など。
- ・私利私欲で繋ぐ歴史は続かない。

右から

「久菴桂昌尼」

「初代:家広・2代:豊政」

「3代:家宗夫妻」

「4代:家長夫妻」

「5代:利豊夫妻」

